「京都から挑戦する“新”21 世紀づくり」

第２回「人口問題を文明史的に考える

～日本の人口の今と未来」

長谷川　和子（京都クオリア研究所）

ほぼ毎日のように人口問題、少子化高齢化問題が取り上げられている昨今ですが、人口減少の問題というのは、日本にとっては、最近になって初めて出てきた現象ではなく、過去にも何回かあって、そのたびに、減少問題に対応し、立ち向かってきた、そういう経緯を経てきたということです。今の日本の人口問題を考える上では、もうちょっと長いスパンで捉える、人口問題を文明史的に考えてみるということのようですが、今日はその最適な方として、上智大学経済学部教授の鬼頭宏さんをお迎えしました。マイナスと言われる人口減少問題ですが、人口という財産をもとに、これからの日本について考えてみたいと思います。では鬼頭先生、よろしくお願いいたします。

「人口問題を文明史的に考える～日本の人口の今と未来」

鬼頭　宏（上智大学経済学部教授）

きょうお話ししたいことは、先ほど紹介していただいたように、人口の増減は何を見せているのだろうか、ということですね。人口の増減というのは、実は、気候変動があったから人口が減ったとか、あるいは、気候がよくなったから人口が増えたっていう、そんな単純なものじゃないということで、人口には、その増減の独自のパターンっていうのがあるんじゃないだろうか。それは、何かというと、ある新しい文明が形づくられる時に人口が増加していく。そして、それが成熟化して、その限界というか、その文明を組みたてている技術であるとか資源であるとか、制度であるとかそういうものが、もう、それ以上人を養えないような、文明の持っている人口の収容能力の上限まで人口が増えると、人口の増加はストップするんじゃないか。そういう、シンプルな考えで、私は話を組み立てているんです。そういう観点から、前半は、非常に長いスパンで見た時に、現代の少子化、あるいは人口減少は、どんなふうに説明できるかということをお話ししたいと思います。それで、後半では、むしろ討論を通じ、皆様方のお考えを頂戴しながら、これからはどんな文明をつくっていけるのかというところまで行けたらいいなと思っております。

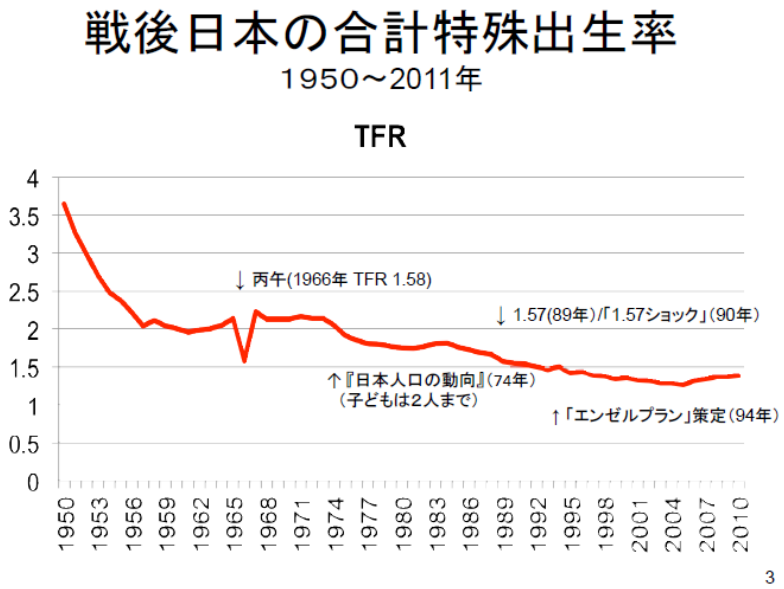
まず、今、人口減少が起きておりますけれども、あまり、皮肉っぽくいっちゃいけないんですが、実は、私は、地球のサステナビリティが問題になり始めたころに、少子化が始まったということを、後でお話ししたいと思っています。人口がいざ減少してみると、社会のサステナビリティっていうことを、あまりみなさんおっしゃらない。最近になって、政府が、それではイカンということで、50 年後、1 億の人口を維持しましょうなんてことを言いだしたんですが、果たしてどこまで本気で考えているのか。あるいは、どういう姿を考えているのか。また、50 年後、１億人維持というのは本当に可能か。それに何か意味があるのか―いろいろ問題はあると思いますけれども、いずれにしても、人口が減りっぱなしだと、サステナビリティの危機が起きてくるだろうということですね。それを最初の図にまとめております。

きのう（6 月 25 日）、総務省が１月１日現在の都道府県別市町村の人口を発表しましたが、そこでも議論されていますけども、人口の分布が非常に不均衡であるということです。つまり、三大都市圏、特に首都圏に人口集中が進んでいて、地方圏の人口が減少していくっていうようなことですね。これは、ひいては、地方圏が特にそうです

けれども、人口が減っていって過疎化どころじゃなくて、集落の消滅なんかも起きたりして、これが、自然災害に対して非常に弱い社会をつくっていくようになったんじゃないか。そういう問題も出てくるわけですし、ここには書きませんでしたが、首都圏を中心にして、これから、高齢者が２倍以上になる市町村というのはたくさんあるわけですね。そういうところで、ほんとに、それだけの高齢者を維持できるか、介護できるかっていう問題がありますね。

それから、人口規模が減るということ自体も、これ、大きな課題ですね。今の首相は、多分そこを心配しているんだろうと思います。経済力もさることながら、軍事力を維持するためにも人口を減らしたくないと思っているのではないかと、私は、内々、憶測しておりますけれども、いずれにしろ、人口規模が減るということは、つまりそれだけでも問題だ。但し、このスピーチの前にディスカッサントの方々と話していたんですけれども、日本より小さな国で、もっと一人あたりの所得水準が高くて豊かな国がある。これ見ると、じゃあ、人口が減るっていうのはどういうことなんだろう？と、まあ、いろいろ問題を考えてしまうんですが、とにかく、政府は、今、人口は減らしたくない、というようになったわけですね。

それからもう一つは、この地域人口の不均衡に加えてですね、いわゆる少子高齢化ですが、年齢構成が非常に不均衡になっている。これはよく知られたことですね。生産年齢人口が減って、高齢者が増え、従属人口がどんどん増えていっている。きのうの報告書でも、ほぼ 25%が高齢者になったといっておりますが、これから 40%ぐらいに向かってもっと増えていくだろう、ということですね。これは、労働力不足につながって、国民経済の規模縮小になる。これは、一方では財政危機をもたらすでしょうし、もう一方では、所得水準も下がっていく可能性も出てくるだろう。ということで、国民生活自体、豊かさを保てなくなっていく可能性もあるんじゃないか、ということが指摘されているわけです。ですから、まあ、これに対してどうしていくかってことで、1990 年代になってから、いわゆる少子化対策が始まったわけです。で、そこから先の少子化対策がどうたらこうたらってのは、私も神奈川県とか静岡県で、そういう委員会のメンバーでいますから非常に喫緊の課題なんですが、もうちょっと退いて見てみましょう、というのがきょうのテーマなんですね。ちょっと、遠ざかって現象を見てみましょう。時代的にも、少しさかのぼって見てみましょうということです。

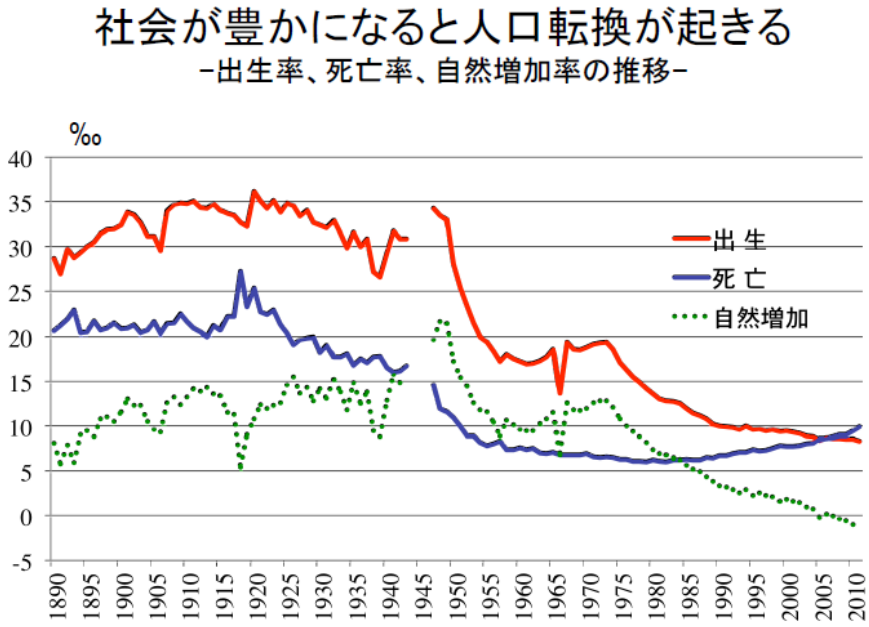


これは、戦後の「合計特殊出生率」（＃３）の推移ですけれども、いつから落ち始めたのかというところだけを見ておいていただきたいのですが、このベビーブームの時代から 60 年代にかけての低下は、いわゆる「人口転換」ということで、死亡率が下がって、出生率も下がっていくという、これ後で話しますが、近代的な人口の構造になっていく。丙午は、ちょっと、特別なケースなんですが…。それから後の少子化ですね。これは、1974 年から始まっているということです。現在の日本では、合計特殊出生率が 2.07 であれば、世代間の人口を維持することができる数字です。74 年当時だと、2.07 じゃあちょっと足りなくて、子どもの死亡率がもう少し高かったので 2.1 ぐらいなんですけれども、そのあたりから、合計特殊出生率がどんどんどんどん下がっていった。2005 年がボトムということになりますね。この時代も、ちょっと念頭に置いておいていただきたいですね。

私は、日本の少子化というのは、三つの点で、ある意味では必然であった、起こるべくして起こったと考えています。実は、その背景に、さっき、冒頭でお話しした文明の問題もあるので、ホントは四つ考えなきゃいけないの

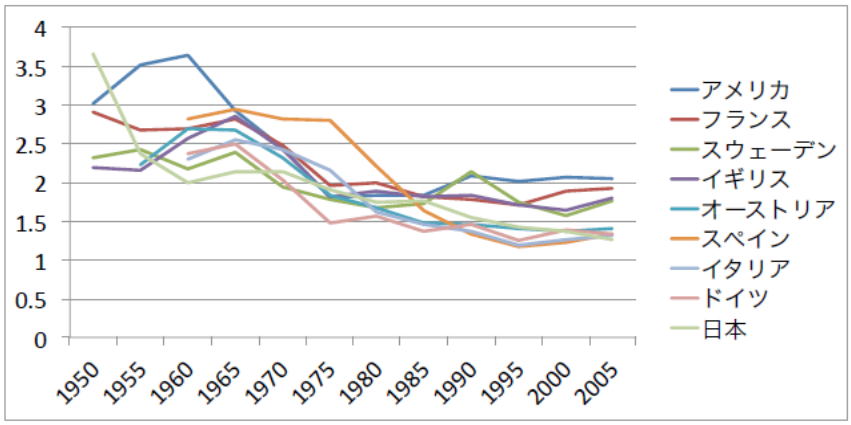
かもしれないですけど、とりあえず、三つということでお話ししてみたいと思います。

一つは、先ほど少し申しあげたんですが、死亡率と出生率の組み合わせ。「多産多死」から「少産少死」へという「人口転換」が起きた。これが出生率を下げ、この延長線上に少子化があるんじゃないか。それから、1974 年という年なんですが、オイルショックの翌年、このあたりから将来の不確実性とそれから、環境とか資源の問題っていうのが国民の意識に上るようになってきた。そして、実は政府も、その年にですね、「人口を増やすことはもうできない」ということで、『日本人口の動向』、これいわゆる「人口白書」ですが、そのサブタイトルで「静止人口をめざして」とうたっている。これ、政府は音頭を取っただけなんですが、あとで申し上げるように、国民運動的に「出生率抑制」という動きが起きてきます。それから 3 番目は、これは先進国はどこでも経験したことですが、日本、あるいは東アジアの出生率が低いわけですけれども、その背景には、社会構造の問題があるんじゃないだろうか。特に、都議会でも問題になりましたけれども、ああいう、日本社会のジェンダー観とかですね、女性観というのが背景にあるんではないか。



5

これは、人口転換の図（＃５）です。死亡率と出生率がこういうふうに低下していっているということです。豊かになるとどこでも、そういうことが起きるわけです。例えば、これ国連と IMF のデータに基づいて作ったものなんですが、左側が、合計特殊出生率と一人あたりのドル建ての所得水準の関係ですね。貧しい国では非常に出生率の高い国が多いわけですが、所得水準が上がるにしたがって出生率は落ちていきます。それと反対に右側の方は、平均寿命です。出生児の平均余命と所得水準の関係で、これは、豊かになれば寿命はどんどん延びていきます。もちろん、限度はあるわけですが、いずれにしても豊かになると出生率は下がって寿命は延びていくという関係です。で、直接、世界的スケールで寿命と出生率の関係をプロットしてみても、右下がりのパターンになりますね。寿命が長いところでは出生率が低いという傾向が見られるわけです。日本だけで見ても同じことがいえます。大正期（1921、25 年）から 2010 年までの、その年の合計特殊出生率と平均寿命の関係でも、そのことが、非常にきれいに出ています。要するに、長期的に見るとですね、子どもの死亡率が下がって、あまりたくさん産まなくても子孫が残せると思うと出生率は下がってくる、という関係がきれいに見られるんじゃないかと思うんですね。ただ、まあ、それが今行き過ぎているわけで、少子化ということに



7

なってしまい人口減少につながっているわけですが、これは、そういう意味では必然的であったということです。

それから 2 番目にですね、このグラフ（＃７）を見ていただきますが、1970 年代に、主要先進国は、いずれも合計特殊出生率が「２」を割っているわけですね。ここが 2 です。日本は薄い緑の線ですけれども、75 年から 2 を割ってます。大体、どこでもそうなんです。但し、そっからまた浮上した国もあります。アメリカ、フランス、スエーデン、イギリスといった国は、1.5 以上に上がって、国によっては、フランスとアメリカは、2 かそれ以上という水準まで上がっていますね。それに対して、下がりっぱなしの国があるわけです。これ、2005 年、日本で一番出生率が落ちた時までしか統計を取っていないんですが、下の五つの国ですね、オーストリア、スペイン、イタリア、ドイツ、日本というのが重なっていますけども、これは 1.5 より低い。だから、日本だけが特別ではなくて、同じように低い国がたくさんあるわけです。

それで、これは、2008 年の国連の「世界人口白書」からとったもの（＃９）なんですけれども、日本以上に低い国があるわけですね。それは、ヨーロッパにもある。東ヨーロッパは軒並み低い。もちろん、現在、移行期で混乱があるということも理由にあると思いますが、どうも、それだけではないんじゃないか。今度の土曜日に、「日仏サミット」で、私も報告するんですけれども、フランスからエマニュエル・トッドという人口問題の研究者が来ます。彼の考え方では、家族の類型が、例えば、夫婦で 2 世代、親子の関係なら 3 世代以上に渡って同居するようなタイプの家族、あるいは、兄弟、兄弟の夫婦が一緒に住むようなタイプの国は父親の権威主義が非常に強い地域で、出生率がとても低くなる傾向がある。一方、これに対して、核家族が 500 年、それ以上にわたって続いているような国で、割に出生率が高い水準にとどまっている、というわけですね。ですから、何か、人類学的な背景があるんじゃないか、ということです。まあ、夫婦だけで子どもを育てようとする時に、地域とか政府とか、それから企業とかのサポートシステムができてるかどうかっていうことが原因なんではないか、トッドが、そういうふうに権威主義というものと結びつけて、低出生率を説明しようとしています。これが日本の少子化が、ある意味で必然であるという三つ目です。

3 少子化：日本は特殊か？

ー超低出生率国には共通の特徴があるー

アジア		西・北欧		東・南欧	
香港	0.96	リトアニア	1.26	ポーランド	1.22
韓国	1.20	ラトビア	1.29	ボスニア・ヘルツェゴビナ	1.23
シンガポール	1.26	ドイツ	1.36	チェコ	1.24
日本	1.27	オーストリア	1.42	スロバキア	1.25
中国	1.73	スイス	1.42	スロベニア／ハンガリー	1.28
北朝鮮	1.85	エストニア	1.49	ルーマニア	1.30
タイ	1.85	ベルギー	1.65	ブルガリア	1.31
モンゴル	1.86	オランダ	1.72	ギリシャ	1.33
スリランカ	1.88	デンマーク／スェーデン	1.80	クロアチア	1.35
-		イギリス	1.82	イタリア	1.38
-		フィンランド	1.83	スペイン／マケドニア	1.42
-		ノルウェー	1.84	ポルトガル	1.46

国連人口基金『世界人口白書2008』

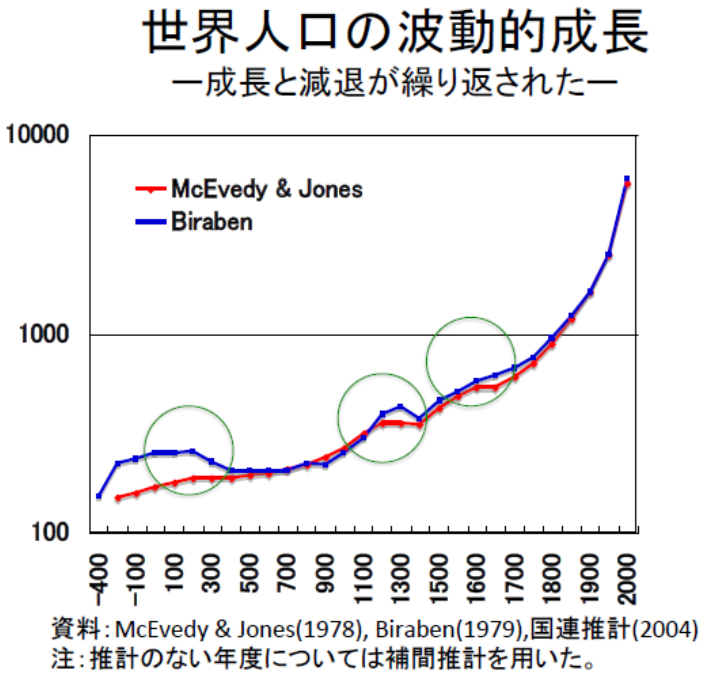
9

先ほど、どこも 70 年代に出生率が低下したということを申し上げたわけなんですが、日本の少子化が始まった 1974 年は第一次オイルショックの翌年で、日本では、実質経済成長が、戦後初めてマイナスになった年なんです。先進国の出生率は低下し始めましたが、ただ、途上国では人口爆発がおきてますから、地球の人口はどんどん増えていってるということで、この年の 9 月にブカレストで、国連が、政府間レベルのものとしては初めて、「世界人口会議」というものを開催します。ちょうど、二酸化炭素を削減して、地球温暖化の被害をなるべく小さくしましょうといって、日本は率先して「京都議定書」で約束したのですが、この時も、日本政府は、それと同じパターンで、行動するんです。実は、その時、日本の出生率は、ほどほどのところまで落ちていたんですね。2 を少し越える辺りで落ち着いていたんですけれども、早く人口をストップさせないと示しがつかない、と思ったんでしょう。それで、「４%だけ出生率を落とせば、昭和 85 年までは増えるけれども、それから後は人口が減りますよ」っていうことを率先していったわけですね。昭和 85 年ってのは 2010 年ですから、ほとんどその通りになったんですけれども…。

で、先ほど申し上げたように、政府はいうだけで、別に旗は降らなかったんですが、まあ、「もっと避妊を普及しましょう」とかですね、こういうことをいうわけですね。いろんな民間の団体とか、それから政治家とかが集まって、例えば岸信介さんも、メンバーで議員連盟のトップで講演されましたが、「日本人口会議」というのを、3 日間にわたって開くんですね。そして、その決議として、「子どもは二人までを、国民の合意で実現しましょう」と訴えるわけです。それを、新聞も大々的に書きますね。その翌年から、合計特殊出生率が 2 を割りこむようになる。マスコミの影響ってのは、非常に強かったんだろうと思います。そういうように、少子化というのは、ある意味必然的なものがあり、特に日本では、低くなる理由があったんじゃないかということです。

では、まとめに入ります。

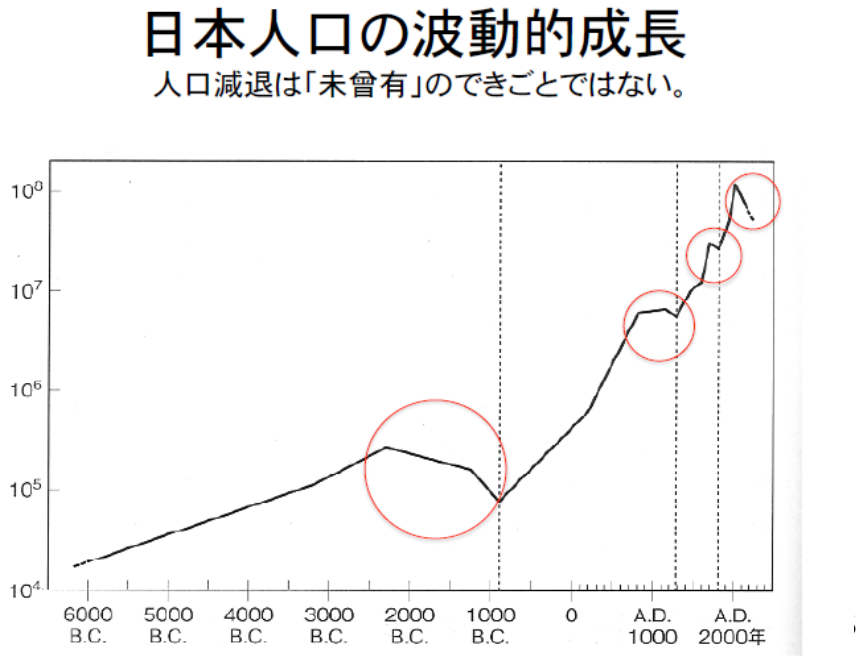
まず、人口というものは、一体どのような動きをしてきただろうかということです。国連の発表している数字を見ると、あるいは、たいていの教科書で、ですね「産業革命の時期、18 世紀の半ばから、世界人口は急速に増えました。それより前は、ちっとも増えていなかったんです」というそんな図をよく書いているんです。ところが、いろんな研究者が独自に推計したものはですね、そう単純ではない。特に、この目盛を対数にしてみると、はっきりそれが出てきます。ここでは、二組の推計を出しております（＃12）。アメリカのマッケブディとジョーンズという人の推計と、フランスの人口研究所のビラバンという人の研究なんですが、多少ズレがあるんですけれども、大体、西暦 100 年～200、300 年ぐらいのところは、人口が停滞する、あるいは減少しています。もう一つは、1200 年代～1300 年代のところ、人口は頭打ちになる。あるいは、黒死病の流行った時期ですから、減少するというのがあります。それから、あまりはっきりしませんけども、マッケブディとジョーンズので見ると、17 世紀に人口が停滞している。この時期、ヨーロッパは明らかに、10 年以上にわたって停滞しています。マッケブディとジョーンズは、世界全体の人口についても停滞しているといっているわけですね。



12

で、これからどうなるのか。これは、いろいろ議論がありますけれども、先進国では、もう、自然増加マイナスのところが増えていますね。日本だけじゃありません。ヨーロッパでも。そういうところが出ている。それから、世界人口でも、21 世紀の終わりには 100 億を越えるけれども、もうそんなに増えなくなりますよ、ということを国連が言ってます。ですから、おそらく世界的にも、2000 年の前から、4 回目の人口の停滞期に入ってきているんだろうと思うんですね。日本は、その先頭を切っているんだろうということです。

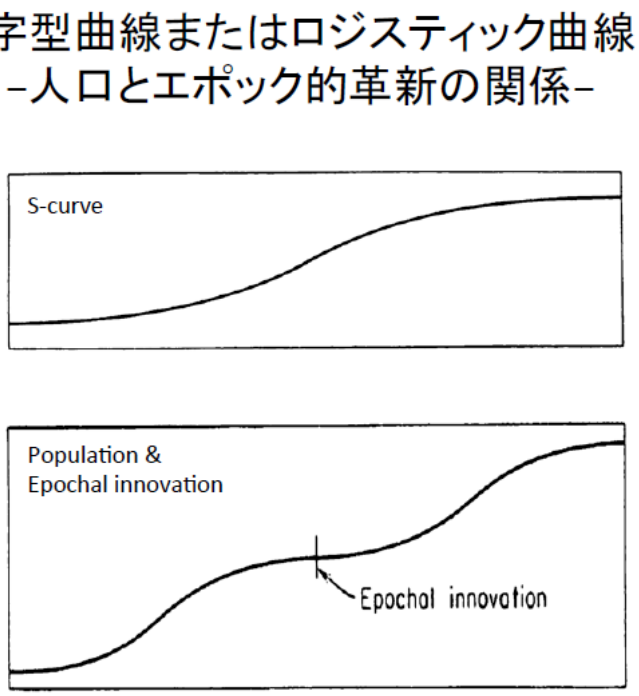
これは、いろんな研究者の推計されたもの



13

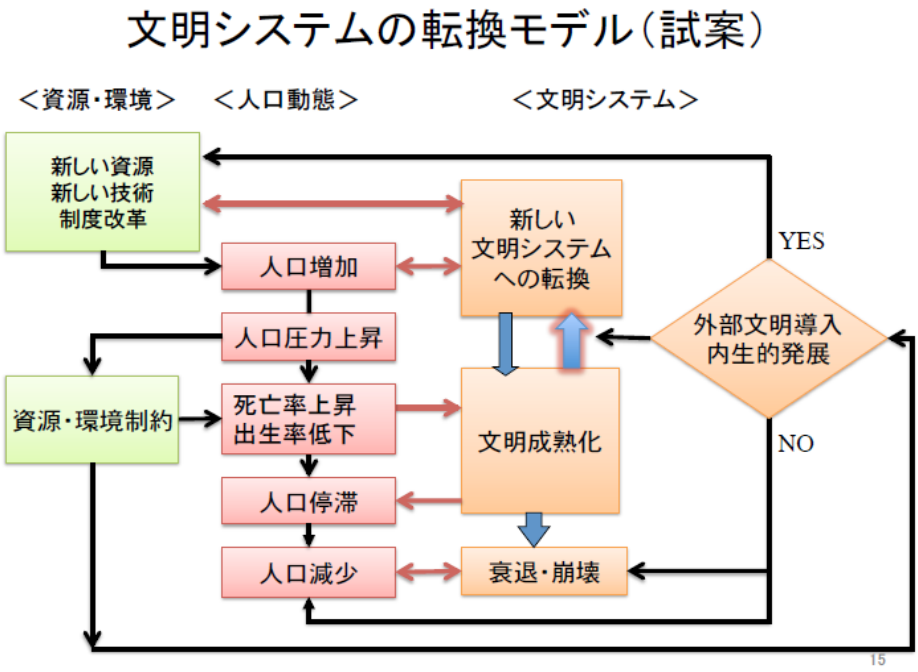
をつないで、日本列島の人口の推移を描いたもの（＃13）ですけれども、わりにきれいに、四つの停滞期、あるいは減退期といったほうが正確しょうが、それがあります。つまり、縄文時代の後半平安から鎌倉にかけての時代、江戸時代の 18 世紀、それから 21 世紀。これが、日本の歴史上の人口停滞期ですね。

で、どうして増えたのか、あるいはどうして頭打ちになったかについての仮説なんですけれども、下の図（＃14）は、どんな教科書にも出てくる図です。人口というのは、一定の条件のもとでは、最初は増えるけれども、それは頭打ちになるんですよという、ここでは「S カーブ」と書いてありますが、「ロジスティック曲線」という名前が付けられた、S 字型を引き伸ばしたような形ですね。これは、多分、動物の個体群の研究では必ず出てくるし、植物でも出てきます。定式化されたのは割に古いんですけれども、実験で確認されたのは 20 世紀初めですね。アメリカの生物統計学者のパールとリードという人が、ショウジョウバエをいろんな条件で飼ってみると、いずれも S 字型の曲線を描いて、あるところで増えなくなってしまう。それを人口にも当てはめることができるだろう、ということです。こんな図は描いていませんけれども、18 世紀の有名な人口学者のマルサスも、言ってることは同じですね。初めのうちは、人口はどんどんどんどん増えるけれども、だんだん、そう増加できなくなってくるっていってますけども、それは、たいていの生物に当てはまると思います。これは、要するに、その、一定の条件、つまり、「人口収容能力」っていうものが、ビンであれ、地球であれ、日本列島であれ、あるってことですね。



しかし、人間の人口というのは、どっかで一旦頭打ちになって、あと、単調に推移するんじゃなくて、先ほどの世界人口とか日本の人口の推移を見ていただいたように、S 字型のカーブが積み重なるようにどんどん増えてくるという、経過があったわけですね。それは、技術革新が行われたからだ、ということです。つまり、同じ地形、列島の中でですね、技術革新が行われると、人口収容能力の限界が引き上げられる。それによって、また、人口が増え始めた、というふうに考えることができるだろうと思うんですね。

具体的に、そのメカニズムを簡単に表（＃15）にしてみたんですけれども、ここが人口で、S 字曲線のパターン。増加して人口圧力が増していく。すると、マルサスが考えたように死亡率が上昇するか出生率が低下して、人口は停滞していきますよということです。



しかし、人口圧力が増加した時、これ以上の発展の余地がないということで、資源開発したり、何か技術革新を行ったり、外部から新しい技術、文明、制度というものを取り込むということが起こり、新しい文明システムへの転換をするとすれば、再び人口が増え、次のサイクルが始まる—そんな流れを示そうと思ってるんですけど、まだうまくいっていません。これからの議論でも、いろいろお知恵をいただき、改良していきたいと思っております。

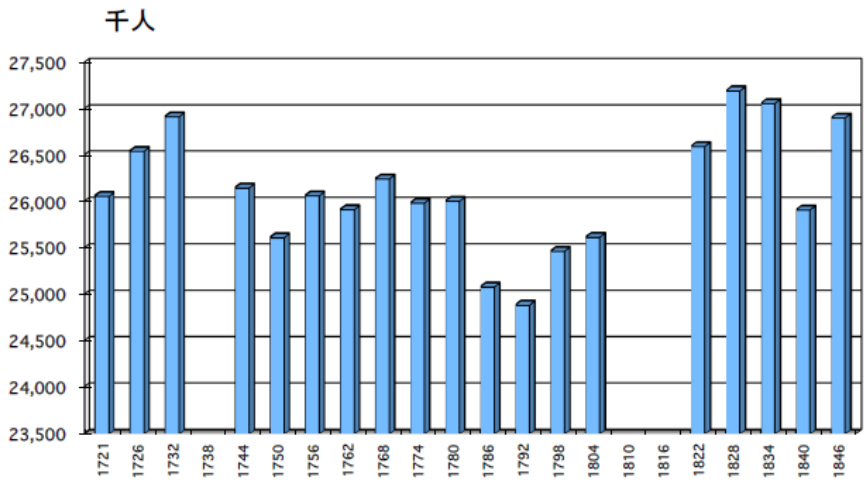
人口波動は文明システムの転換に対応する

	1 縄文	2 水稲農耕化	3 経済社会化	4 工業化
最大人口密度(人／km²)	0.9	24	112	345
文明の段階	自然社会	農業社会 （直接農産消費）	農業社会 （間接農産消費）	工業社会
エネルギー資源	生物+人力	生物+人力+自然力 （有機エネルギー経済）	生物+人力+自然力 （高度有機エネルギー経済）	非生物+自然力（水力） （鉱物エネルギー経済）
主要な経済様式	伝統経済	伝統 +指令経済	伝統+指令 +市場経済	市場経済

16

では、具体的にどういうタイプの文明システムが展開されて来たかというのを示したのがこの図（＃16）です。要するに、縄文の狩猟採取の経済、稲作農耕の経済、それから室町時代あたりからの市場経済化、あるいは商品経済化です。そして、最後の箱が幕末、明治維新以後からの工業化ということで、新しい資源を使う、生産意欲が高まるなど、いろんな条件で、人口の収容能力が高まってくる。その、文明システムの転換に応じて人口も増えて、そして、一旦頭打ちになって、また増えてという波を繰り返してきのだろう、ということを申し上げたいと思います。

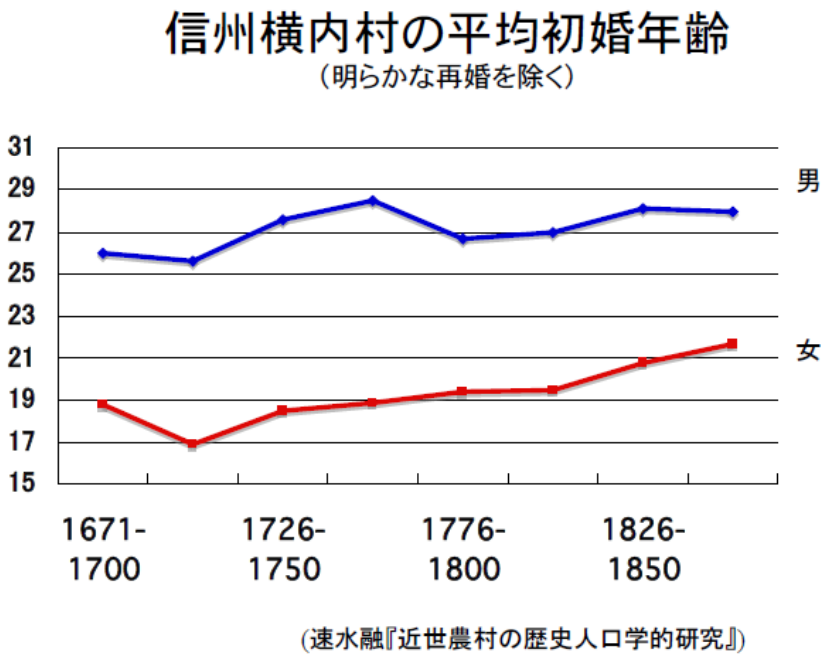
幕府調査人口（1721-1846年）



17

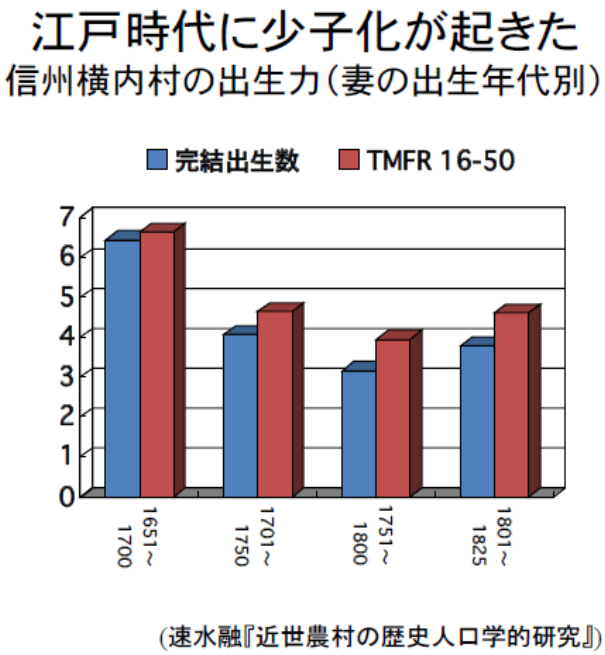
では、最後に、具体的に江戸時代のことを、少し見ておいていただきたい。これ、吉宗が始めた全国の人口調査の表（＃17）で、武士の人口は含まれておりませんけども、全国人口でいうと大体、3000万人ぐらいでスタートするんですね。1600年ごろの人口は、多分1500～1600万人といっていいと思います。そっから、1720年代まで、ほぼ人口は倍増します。3000万人越えるところまでいきます。ところが、そこからあとの1世紀あまりというのは、人口が頭打ちになります。グラフは、ゼロから描いてないんで極端な動きをしていますけれども、大体、3000万人前後で推移します。125年間で、たった3％しか増えていません。ここの落ち込みのところってのは、享保の飢饉であるとか、宝暦から天明にかけての飢饉、あるいは天保の飢饉とか、飢饉の影響を受けております。小氷河期ですから、非常に冷夏が来たりすることで、人が死んでいるんですけども、実は、その被害というのは非常に大きいんです。ある研究者の推計によりますと、江戸時代の場合、1回の飢饉で33万人ぐらい死んでいる。これは、幕末からですけれども、天然痘とかコレラ、それ以外の疫病が流行ると1回で、13万人ぐらい減るということがあります。

しかし、これ、必ずしも、ヨーロッパと比べて日本が飢饉とか疫病に、特別弱かったというわけじゃないんですね。それより、もっと人口減退を引き起こす原因はですね、現代文明と同じ、少子化にあるんです。これは、江戸時代のある村の平均初婚年齢の推移の表（＃18）です。大体、どこの地方でも同じパターンです。17 世紀の終わりから 19 世紀までの期間、大体女性で少なくとも 3 年、結婚年齢が遅れていますね。つまり、子ども一人分減らすぐらい晩婚化が起きている。東北だと、もっと早婚で、14､5 歳なんですがやはり 17 歳ぐらいになっていきます。パターンは同じですね。これが一つです。



18

もう一つは、結婚している夫婦の産む子どもの数（＃19）です。これは 50 歳まで結婚が続いた女性の実際に産んだ子どもの数です。但し、ここには乳児死亡の多くの部分は含まれておりません。年に 1 回、キリシタンを取り締まるために調査をやるんですけど、その 1 年間の間に生まれて死んじゃった子どもは入ってこない。それは、多分、15%か 20%ぐらいと思います。それを上乗せしてやらなければいけない。すると、17 世紀の後半に生まれた女性ってのは 8 人ぐらい子どもを生んでたはずです。それから、ピンクで描いた方は、結婚している女性の合計特殊出生率、有配偶出生率ですね。16 歳から 50 歳まで結婚が続いたら、理論上、このぐらい子どもを生むでしょうという話ですね。大体同じです。ところが、18 世紀になって生まれた女性って、がくっと子供の数が減るわけですねえ。これも、２割足してやると５人は産んでたということになります。今と比べれば多いですけれど、減り方が激しい。特に､18 世紀後半になりますと、これ、3 人、せいぜい４人ですね。幕末になるとちょっと増え、明治期の女性は、平均して５人産むようになるわけですけれども、こんなふうに江戸時代後半､特に人口が減った 18 世紀に産まれた女性ってのは、子どもを産まなくなっている。つまり、ぎりぎりの水準で、子孫を維持できる子どもの数しか産んでいないということです。そういうところに飢饉が来たりすれば、当然人口は減ってしまうという現象が起きたんですね。

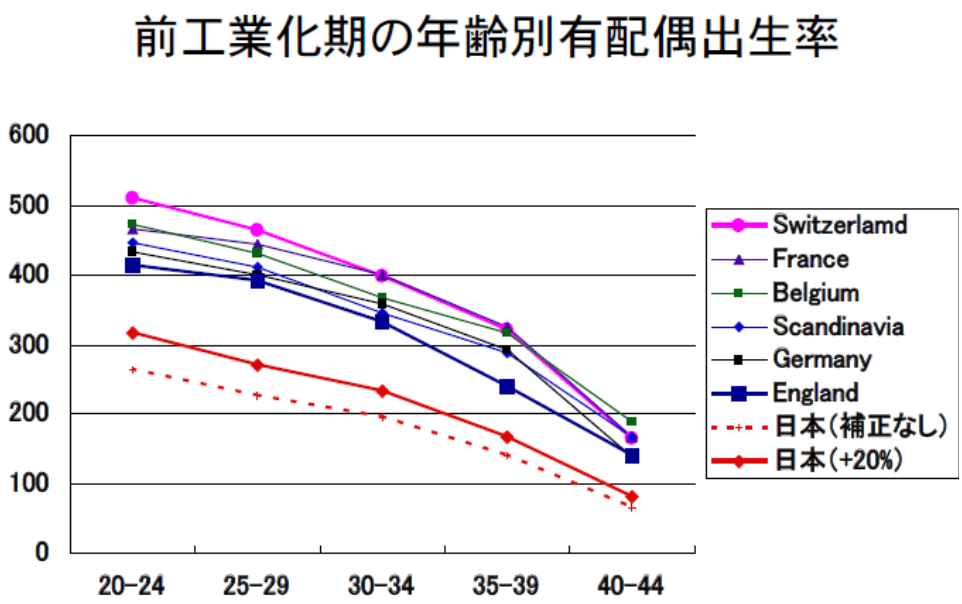


19

では、なんでそんなことになったかということですが、結論から言えば、耕地面積が、もう、開発の余地がなくなってきた。もちろん､明治以後、あるいは幕末にも開発は行われましたが、これは、お金がかかる海岸の干拓などで、だから、農民が、村の周辺部で、コストかけない開拓ができなくなった。これが一つの理由。それから、もう一つは、肥料ですね。まだ、金肥、お金で買った肥料を使うというのは、18 世紀の前半には一般的ではなかったかも知れませんが、その肥料が手に入れにくくなる。また、生活のための燃料。里山も、やはり、利用するのにいろんな制約が起きてくる。いずれにし

ても、村の規模が大きくなったり、人口が増えたりして、環境資源の制約が一番強く働いたんじゃないか、といわれています。これが、江戸時代後半の人口停滞の主要因だろうと思っています。

これは、工業化以前の社会のヨーロッパのいくつかの集落の女性の出生率と日本の場合と比較した図（＃20）です。これは結婚している女性です。日本の場合 20%の補正をしているんですが、それでも、ヨーロッパの水準よりは低い。江戸時代は、いかに、出生率が抑制されていたかということですね。これ、ある意味では、意図的に出生率が抑制され、人口の停滞がきたということですね。



西欧（1750年以前）：Flinn, *The European Demographic System, 1500-1820.*
日本（1875年以前）：鬼頭「前近代日本の出生力―高出生率は事実だったか」 20

では、人口の停滞期、減退期ってのは、文明史的にどういうことがいえるかということなんですが、実は、決して貧しい時代ではないということですね。いずれも、縄文中期以後とか、平安、江戸時代の後半であるとか、まあ、21 世紀は、これからどうなるかわかりませんが、そこに、三つ箇条書きにしておりますように、人口の成長期に取り込んだいろんな要素をひとつの形にまとめて、その次の時代にとってみれば伝統的と思われるような結果を形成しているんじゃないだろうかと。そういうことなんですね。そういう意味で、それ以上成長しにくいという意味で成熟化した時代と言えるし、豊かな文化をもつようになったという意味でも、成熟した時代と言えるんじゃないかと思います。そしてまた、その中で困難がいろいろ生まれてくる。それは、次の時代の「文明の種」を生んだ時代、あるいは胚胎した時代であるということが言えるんじゃないかと思いますね。

それをいうために、この、実は、人口の停滞期は、幕末、18 世紀の後半、特に 19 世紀に入ってから、次の時代に結びつくような工業発展ってのが、地方で起きている。そんな工業発展が、地方で始まってますよということを申し上げたいというふうに思ったわけです。これ、各藩の中で、税金が余りかからない非農業部門のウエートがいかに石高に対して大きかったかということをお見せしようと思って私が作った表で、こんな動きが、地方では起こっていたわけです。

では、ここまでお話しして、人口減少していく中で、これまあ、21 世紀のことになるんですけれども、これから、どんな社会を目指していけばいいのか。これは、次の議論の中で、みなさんのお知恵をお借りしたいと思います。

「京都から挑戦する“新”21 世紀づくり」

第２回「人口問題を文明史的に考える

～日本の人口の今と未来」

☆ディスカッション

▽テーマ

「人口問題を文明史的に考える～日本の人口の今と未来」

▽ディスカッサント

末原　達郎（龍谷大学経済学部教授・農学部設置委員会委員長）
高田　公理（佛教大学社会学部教授）
山極　寿一（京都大学大学院理学研究科教授）

鬼頭　　宏（上智大学経済学部教授）

長谷川　和子（京都クオリア研究所）

鬼頭先生のお話の最後の方で、人口の減少、停滞の時期というのは、価値観が変わり、新しい文明が生まれてくる時いうお話がありました。では、次は、この人口減少期にどう新しい文明をつくっていくのかというところも含めてディスカッションをしていただきたいと思います。きょうは、人口問題を議論するには実にもふさわしい方々ばかりですので、とっても期待しております。ファシリテーターは山極さんにお願いしております。では、よろしくお願いいたします。

山極　寿一（京都大学大学院理学研究科教授）

新しい文明がつくられていく時に人口が急増するという話と、鬼頭さんが最後にお話になったこととは非常にマッチしておりまして、この中に具体的に語っていただいたと思うわけですが、いろんな問題点が指摘されておりました。たとえば、産業経済の構造と人口は密接にリンクしているとともにですね、出生率と子どもの生存率は逆比例するという話ですね。少子化は、1975 年以降、先進国ではどこでも起こっている現象であって、いくつかの社会のストラテジー微妙な差があるということでした。では、まず、鬼頭さんの長年の盟友であります高田さんから一つご意見をお願いしましょうか。

高田　公理（佛教大学社会学部教授）

日本の人口の波動的成長をめぐって教えてほしいことがあります。

まず、BC2000 年から同 1000 年の間に人口が減っています。この時期は縄文時代が成熟した時代でしょ？　ついで AD1000 年から 1200 年ぐらいですか。この時期は古代文明が成熟した平安末期と重なるのでしょうが、平安京では鴨川の河原に死体がゴロゴロしていて、それを犬が食っていたりする、いわば地獄絵に描かれたような、まさに「末法の時代」ですね。

さらに三つ目は江戸時代でしょう。そして 21 世紀の初頭あたりからも人口は減少傾向を辿り始めている。

だとすると、徐々に人口が増加し始めたのち、増加率が急速に高まり、やがてプラトー、つまり高原状に達したのち、それが停滞するというＳ字カーブが、過去 4000 年余りの間に 4 つ、描けるのではないかと思うのですが……。そのＳ字カーブのつなぎ目の部分で、社会構造というか、文明のパラダイムが大きく転換した。そんな風に考えていいのでしょうか。

鬼頭　　宏（上智大学経済学部教授）

まあ、江戸時代までは、日本列島の中だけで、生活が成り立ってましたけれども、現在はぜんぜん違うわけですよね。地球規模で、資源、食糧とか考えなきゃいけない。ですから、日本列島の中で、日本人をもっと増やしていくということは、多分、できないと思うんで…。国連の推計でも、世界人口自体、2100 年が近づくとフラットに近づいてくるといっていますから、それぞれの地域が、もっと人口を増やしていくというのは難しいと思いますね。ただ、ゼロサムゲームで、麻雀やってるみたいに誰かが、ガーッと点棒を稼いで、あとは沈むというような変動があれば別ですけれども、地球規模で見てもフラットになるということですから、日本も、当然増やせないという状態にはなるんじゃないかなとは思いますね。

高田

さきほどの話を少し別の方向に進めますと、こんな見方もできそうですね。つまり、現代までの文明は、ひたすら物質の豊かさを追求してきた。この点に関しては、水準こそ違え、農業社会も工業社会も同じだと思います。その上で現代の生活水準を捉えてみると、かなり豊かになった日本をはじめとする先進地域において、今後も一層の物質的な豊かさを追求する必要があるのかどうか。むしろ代わりに、何か生活のなかに楽しみのようなことを求める方が大事なんではないか。そんな気がするのですが……。

こう考えてみると、この先は人口が増え、経済が成長し続ける必要はないのかもしれない。そうしたことが必ずしも社会の発展に結びつかない、そういう時代に、われわれは逢着しているのだとも考えられそうです。

さきほど鬼頭さんは、1974 年あたりに、そういう兆しがあったという意味のことをおっしゃったように思うのですが、その少し前、1970 年でしたか、ローマ・クラブが『成長の限界――ローマ・クラブ人類の危機レポート』を発表しました。それは、さまざまな自然資源をはじめ、地球の環境容量のある種の限界性を、初めて話題に取り上げた論考でした。

ところが、その後も石油などの化石燃料が、つぎつぎに発見されて、その埋蔵量は増え続けてきた。という意味ではローマ・クラブの指摘は当たらなかったかのように思われがちですが、今後の人類文明を超長期の視点で考えてみると、やっぱり、もうこれ以上の資源浪費を続けていけば、保たないのではかという気がすます。

だとすれば、1970 年代半ば以降、日本の人口が増えなくなったのは、いわば人類全体の未来に対するイマジネーションを先取りした結果かもしれない。そんな風に、ぼくは今日の鬼頭さんのお話をうかがったのですが、いかがでしょうか。

鬼頭

そうですね、今、図を作りなおそうと思ったんですが、時間もなくそのままいきますけれども、おっしゃったように、これ、対数の目盛りになってますよね。（資料）これを、普通の十進法の目盛にすると、きれいなカーブになって、そして、国連の将来予測をくっつけると、ちょうど蛇が頭をもたげているような感じ、こういう形になるわけですね。ですから、人類史の上で、世界人口だとローマ帝国からしか推計できてませんけれども、ビラバンという人は、もっと古い旧石器も出しているんですが、そういうのを見てみてもですね、人類というのが、ある種の壁

に、もうぶつかっていると言えなくもないのかな、と。全く異なった生活様式を求めていけば別ですけれども、高田さんがおっしゃった通りに、石油に基づいた文明ってのは、もう限界ではないだろうかと思いますね。で、もし、他の資源を使っていったとしても、例えば、再生可能エネルギーを開発していったとしたらどうなるかといったら、もう、人口はそんなに増やせないんじゃないでしょうか。あのう、今日あたりの新聞でも、ミドリムシ―ユーグレナを使って、その油で飛行機を飛ばそうということで、ANA もそういう会社に出資するんだという記事が出てましたけれども、そうすると、そのための、エネルギーを作るためのスペースが必要となってきますから、人間をそんなにやたらと増やせないと思うんですよね。再生可能エネルギーに転換しいていった社会であればあるほど、人口は増えにくくなってくるというふうに思いますね。

山極

エネルギーの問題が出ましたが、その前に、農学者の食物生産ということで末原さんがお見えになっていますので、食物生産についてどう思われるか、ご意見をうかがいたい。

末原　達郎（龍谷大学経済学部教授・農学部設置委員会委員長）

食糧生産の話になると、急に、われわれは、年代とともに、直線的に食料を増産しそれを消費し尽くしてきたと捉えていたわけですが、先ほど、鬼頭先生がおっしゃったいくつかの波があるというのが、お話を聞いていて考えどころだなと思いました。たしかにそうだなと思います。急に増える時期があれば、また、ちょっと減る時期もある。そうして、次のシステムへ変わっていくのじゃないか。そこを、文明という言い方で語られたと思います。

そしたら、食糧さえあればということで、最初の頃は、食糧さえあれば生きていける。いまのわれわれの時代では、もう、食糧は、基本的に有り余っているという話ですね。日本のレベルで見ても、食糧は、たいへんたくさんある。実際どのように、それを手に入れるか、買ったり、作ったり、いろいろ方法はありますが、全体としては多い。世界全体で見ると、食糧全体としてはものすごくある。ただ、地域間ではずいぶんバランスが悪くなっています。場合によっては、穀物をエネルギーに変えていこうという試みもあります。例えば、トウモロコシをエタノールにしていこうというようなところが出てきていて、まあ、われわれの世界観としては、食糧さえ足りれば人口が増えるという枠組みでないところで、考えていくしかないだろうと。確かにそうなると、人口が増えるのがいいのかどうか、あるいは、食糧の量が増えるのが単にいいのかどうか、いうことも考えられたらいいと思いますね。

山極

今のことで、私も思ったんですけど、少し前の説では狩猟採集から農耕へ、農耕社会から都市文明へ、技術の改良があって、インフラが変わって、長寿社会になって人口が増えたという話だったんです。が、今の考えはですね、人口が先に増えて、その人口圧によって、新しい技術や新しい文明ができたというシナリオになっている。そうい

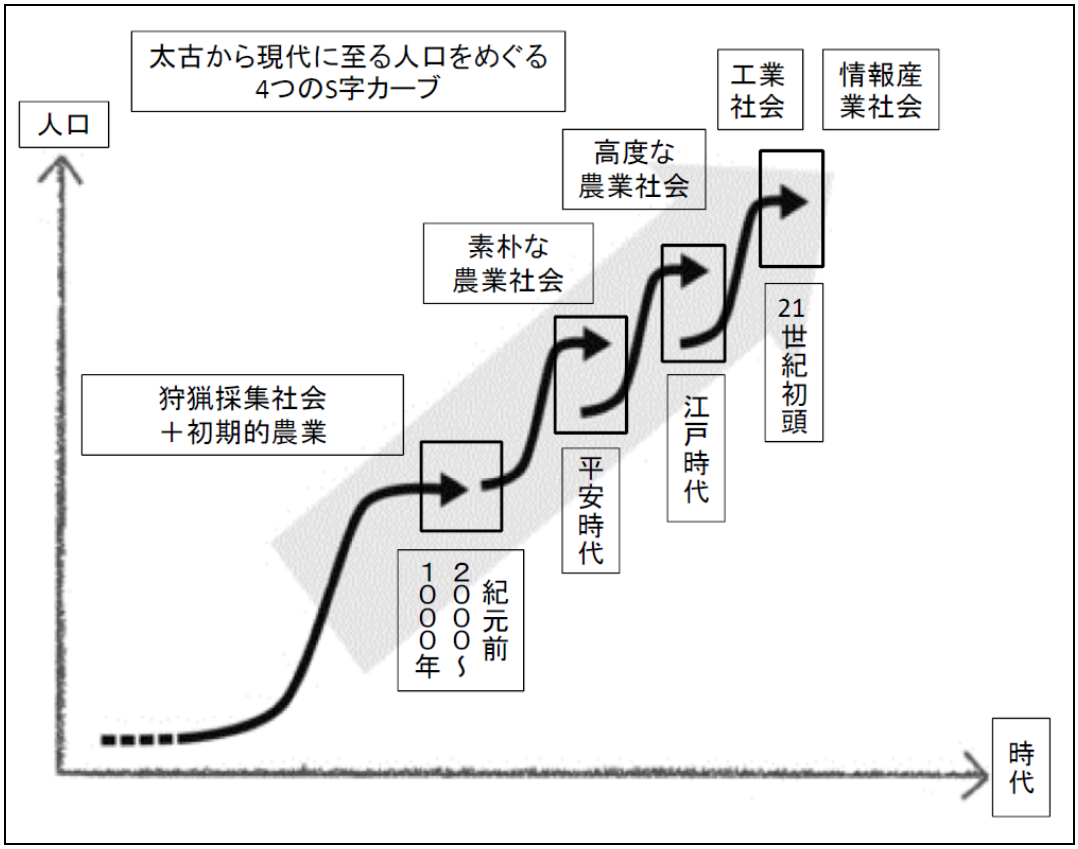
うことでよろしいですか。

鬼頭

えっと、経済学者の考え方ですと、例えば、その典型といえるかもしれませんが、ボズラップという、もう亡くなった女性の経済学者ですが、彼女は「技術発展というのは人口圧力が大本だ」という命題を設けて研究したんです。要するに、今までのやり方では食っていけなくなった時に、初めてその技術開発に乗り出す。これ、食べ物だけでなく、工業生産についても同じことをいうんですね。で、今までのやり方だと、もうこれ以上やっていけない、多く作れないとか、資源がなくなったので、次の別のものを利用しなきゃいけないとか、そういうことを広い意味での人口圧力、と彼女はいうんですが、農業発展はまさにそれなんですね。何も、畑を耕し、種を撒いてやろうなんて苦労なことはしたくない。焼き畑でいけるんなら、それでやったらいいじゃないか、と。それで、彼女は、アフリカあたりの焼き畑農耕の調査から始めて、技術がないからとか、技術が貧しいから焼き畑農耕でとどまっていて、人口密度が希薄であるのではない。逆に、人口密度が少ないので、贅沢に土地を使えるから、日本でやってるような労働集約型の農業なんてやる必要がないんだ、と説明していますね。むしろ、余暇、レジャーを大事にするという時代、社会があるんじゃないだろうか。これは、先ほどの、高田さんの質問と関係してくるかもしれませんが、ま、経済学者は、大体そういふうに考えてますね。

高田

ところで、鬼頭さんへの冒頭の質問の内容を踏まえて、ポンチ絵を描いてみると、つぎのような図になるかもしれないと思います。



この図を描くに当たってのヒントは、梅棹忠夫さんの「情報産業論」という論文にあります。「情報産業」というと、1981 年に出たアルビン・トフラーの『第三の波』を思い出す人が多いと思いますが、梅棹さんは、その 20 年ば

かり前に、より包括的で刺激的な議論を、この論文で提起したんですね。

この図は、そのことを思い出しながら描きました。要点を言うと、人類文明は狩猟採集社会から農業社会と工業社会を経て情報産業社会に向かうという、一種の発展段階説なんですが、今日の鬼頭さんの話を参考にしながら考えると、どうも農業社会には2つの段階があるのかもしれないと思わされました。

最初は、野生植物を栽培して穀物生産を始めた段階です。ここでは大地の深耕と大規模潅漑が重要な役割を果たしました。ところが、たとえば日本を例に取ると、室町時代から江戸時代にかけて、その生産性を高める、いわば第二次農業革命とでも呼ぶべき変化が起こる。その直前に人口停滞が起こったのかなあ、などと考えてみた次第です。

さらに明治以降の近代化の過程では工業化が進んで、化学肥料生産や農業機械の普及などが起こり、農業の生産性は高まるのですが、それ以上に工業それ自体の生産性が高まっていくんですね。その結果、明治から昭和まで、人口増加が進むのですが、ちょうど今、工業社会が成熟段階に差しかかったことで、新たな人口停滞が始まっている。そういうことではないのでしょうか。

ところで梅棹さんは「農業社会」とは「腹の足しになる文明」に支えられ、その後に来る「工業社会」は「筋肉（労働）の足しになる文明」に支えられたのだと考えました。すでに触れたように、工業の発展は農業生産性も高めたのですが、それはそうとして、その後にやってくる「情報産業が基幹産業になる時代」は、簡単にいうと、

「腹はふくれた。筋肉労働から解放されて体も楽になった。で、今後は、脳と神経系を遊ばせ楽しませる時代なんや」

とまあ、そんなことを主張したかったのだろうと、ぼくなんかは考えている次第です。

山極

まさしくそうだと思うんですけど、この話をすごく乱暴に言ってしまうと、ある生活様式で、人口が増えていく。ところが、大きな気候変動があって環境が変わり、それまでの生産様式では食えなくなる。それで、新しいやり方に移行する。それで、豊かになるから…、というんだけど、狩猟採集と農耕を比べると、同じ条件では農耕の方が豊かじゃないんですよ。工業社会もそうで、農耕社会と比べれば、圧倒的に時間を生産に取られるわけで、全然豊かじゃない。それに現代は気付き始めたんじゃないかな。つまり、今、自己実現とかいっているのは、自分の時間を取り戻そう、と。ミヒャエル・エンデの小説『モモ』に「時間泥棒」という言葉がありましたが、個人の自由な時間が見直されてきました。ただ、食料生産や家族のために時間を使うんじゃなくて、自分の時間を大事にしましょうということが、グローバリズムの時代になって改めて問題になってきたんですよ。それまで、食べること、親族のことなど、身の回りのことにとらわれてきたのが、視点が大きく広がりました。恐らく、大きな質的転換の時代に入ってきたといえるんじゃないか。

高田

今のお話を労働時間との関係で考えてみると、面白いことが分かってきます。

まず、20世紀に生き残っていた狩猟採集民のデータによると、彼らの年間労働時間は800時間ぐらいで済んでい

るんですね。ところが、潅漑農耕民の場合は年間労働時間が 1100 時間以上に増えます。さらに工業社会では、その時間がずっと長くなる。たとえば日本の高度成長期の勤労者の年間労働時間は最大で 2400 時間ぐらいにまで達しました。それが以後、徐々に減少してきて、現在は 1800 時間前後で推移しているようです。ただ、ドイツなどは 1400 時間程度まで減少しているんですね。

こうしてみると、今後とも生産労働から解放された時間は増加する傾向を辿るでしょう。じゃあ、その時間に何をするのかというと、楽しく遊んで過ごそうではないか――そういうことにならざるを得ない。ところが実際には農業と工業の時代の続きで、

「もっと働いて、より豊かになろう」

という強迫観念が人々の背中を押し続けている。ぼちぼち、こうした価値観というか生活感から降りたほうがいいような気がするのですが……。

山極

未来の話もでましたけど、末原さんは、「スローな農業」とか、いろんなこと提案されていますね。これまでの食物生産、農業からみれば、最近、政府は農協もやめてしまえなんてことを言っていますが、どういう、食糧生産が、農業も含めてですね、今の日本人の暮らしに合ってると思いますか。

末原

今、非常に効率のいい農業になってきたわけですよね。でも、今の農業はね、とても工業的なシステムで動いているわけです。農業社会から工業社会へ移っていってるとは思いますが、例えば農業をするにしても、工業的なシステムでやってる。ということは、工業的に効率のいいもの。キュウリでも曲がったものは箱にうまく入らないわけですから、真っ直ぐな方が効率がいい。そういう形になってしまっている。だけど、工業社会でも農業やっている人がいるわけです。狩猟採集をやっている人もいるわけです。それは、なぜかというと、社会構造が全体として変わってきたとしても、狩猟採集とか農業は、常に残り続けるもので、情報産業社会であっても、機械を維持していくという、そういうのがある。これは、効率的な仕事であるか、どうかというのとは違うんですね。自分の中で、自分の生き方として、そういうものを組み入れていくような選択肢が取ることができるようになってきた。つまり、車を作っていくのが好きなように、魚釣りが好きであるように農業もできる、というふうな形に変わってきたと思うんです。

日本の場合は、第二次世界大戦までは、有史以来ずっと食糧不足ですね、それが、1960 年代まで続くんですね。60 年代の半ばになって米の需給バランスが取れ出すわけです。その時は、大体 1200 万トンあれば、外から輸入する必要もなかった。今は、米は、その半分でいいんですが、麺を食べたい、小麦を食べたいというふうなことになっているわけですけれども…。逆にいうと、最も、効率のいい農業のピークというのがこの 60 年代なかばにあったともいえます。ありとあらゆるところを水田にしてしまって、効率的に生産性の高いものをつくって、それで何とかバランスを取って、食糧問題を解決してきたわけです。

でも、そうではない仕組み、狩猟であろうと農業であろうと、これからもずっと続いていくだろうというふうな社会の仕組みっていうのを、私は考えています。

高田

ついでに、今の話の尻馬に乗って言いますと、1970 年代以降の特徴として、ダイエットという言葉の爆発的な流行があるように思います。それは本来「食餌療法」を意味した言葉です。だから、1970 年代以前には、

「よりたくさんのカロリー、脂肪、タンパク質、ビタミンを摂取しましょう」

ということを標榜していた。それが 1970 年に、がらっと変わり、

「カロリーを押さえましょう。そして積極的に、新たに『第六の栄養素』と呼ばれるようになった食物繊維を摂って排泄を促しましょう。汗をかきましょう」

と言うようになった。こうした状況下で、今時の若い人は、「ダイエット」というと「痩身」だと信じて疑わない。そういうことになってしまっています。

これって、効率的な農業生産が可能になって、ようやく半世紀ぐらい前に十分な食糧供給が実現した途端に、今度は「食べ過ぎたら、あかん」という時代がやってきたということではないのでしょうか。

山極

ちょっと話を移しまして、現在、例えば、政府の国土計画では 2050 年というのが一つの区切りの年になっていて、その時に、多分、日本の 3 分の２の地域は、人口が半減するだろう。それに、３分の１、いや、20%でしたっけ、人口がなくなってしまう、と。全くの無人地帯になってしまう、といわれています。その時、例えば、都市と地方の関係とか、地域共同体がどういうふうに維持できるのか、といった話が大きな問題として関わってくるわけです。政府は、女子の労働力を伸ばそうとか、高齢者を、労働者に組み入れ労働に従事してもらって、年金給付年齢をもっとあげようとか、移民をどんどん奨励するとかいろんな「骨太の政策」を打っているんですが、これは、人口の専門家の鬼頭さんから見るとどうなんでしょう。

鬼頭

きょうここに来て、ちょっと、高田さんの顔とかみて話していると、30 年ぐらい前に戻ったような気分になってくるんですね。どういうことかっていいますとね、少子化が始まったころの 1980 年代なんですけれども、日本医師会に呼ばれて、出生率の低下についてどう考えるか、講演させられたことがありました。そん時のタイトルが、今、思い出すんですけども「少子社会への期待」というものだったんですよ。それで、骨組みとしては、しょうがないんだ、と。出生率が下がっている、そういう状況なんだ。文明史的にそうなんだ、ということだったんですが、叱られましてね。ガンガンいわれたってわけじゃないんですけれども、質疑応答の時に、「そうはいっても、これから、産婦人科医はどうするんだ」というような、まあ、絡まれたというか…。だけど、ぼくは、その時の純粋な気持ちを、もっと保っとくべきだったなと、と今あらためて思いました。

つまり、高田さんがおっしゃったように、成長期というのは、人口を追っかけて、がむしゃらにモノを作んなきゃいけない、開発しなきゃいけない時代だったと思うんですね。ところが、70 年代とおっしゃったけれども、江戸時代だって吉宗の時代を過ぎてくると、がむしゃらには働かなくてもいいというふうになってきて、実際に農民の社会の中でも、「遊び日」っていうんですかね、これが、

どの地方でも増えているというんですよね。それから、伊勢参りにいくような連中が出てくる。あるいは、余暇に川柳や俳句作ってみたり、歌舞音曲やってみたり、そういう、西山松之助さんが言う「行動文化」、物見遊山にいったりするようなことが出てくるのが 18 世紀ですよね。特に、半ばぐらいの田沼期ってのは一つのピークじゃないかと思うんですよね。これが、特に文化・文政時代になると、もっと、都市や農村でも行われていく。それから、ある研究者が「野の舞台」という本を出していますけれども、農村のあちこちで、お能にしろ歌舞伎にしろ、自分たちがやったり、役者を呼んだりして楽しむようになってきますね。

そういう遊びを重視した、余暇を楽しむ局面に、どうも江戸時代の後半って入ってきている。私も、21 世紀って、そういうふうに考えるべきなんだろうと感じたんですね。きょう、ここに来て、初心に帰ったような気になってきましたね。実は、ちょっと反省してる面があるんですよ。今、行政の仕事に関わってたりすると、ぼくは、人口を増やさなきゃいけないとは思っていないんですが、どうしても、「人口減少を止めるにはどうするべきか」なんて旗を振らなきゃいけない。でも、今、初心に帰るべきだと思いました。

では、どう考えるかっていうと、今の政府が 1 億を維持しようっていってることなんですが、確かに、今のままだと 2100 年に、4000 万人台までいってしまうといわれていて、そうなると、いろいろ大変なことが起きると思います。しかし、私は、大事なのは 1 億を維持するかどうかってことじゃなくて、人口が、どこの水準でもいいから安定すればいい。安定すれば、みんな困ることはないんで、そこで土地利用とか考えたりすればいい。ですから、今の政府の 1 億というのは、ぼくは、ちょっと間違ってると思ってるんですね。それよりも、あまりインパクトはないかもしれないけど、2・07 の出生率を目標にして、人口が増えも減りもしない状態を作ろうということなんです。要するに、1974 年に政府が言ったことを、これから実現するってことですよ。仕上げる段階ですよ。今まで出生率落としたんだから。それを元に戻して、人口を少し減らした段階で安定させるっていうのが一番の目標だと思います。

じゃあ、その時に社会をどうするかってことですけれど、当然、どの時点までいけばいいのかってのは、なかなか難しいんですが、今の政府は、ちょっと急ぎすぎですね。合計特殊出生率は、2030 年までに、今の 1・43 を、2・07 に引き上げなくっちゃあ、50 年に 1 億人の人口は維持できない。これは算数でわかるわけです。はっきりいわないけれども、ちゃんと書いてありますよね。2030 年頃までに、2・07 に戻しましょうって。これは、しかし、現実的ではないですね。よっぽどドラスティックな変化がないと。それで、現に、1974 年から 2005 年まで出生率は落ちてきて、今、徐々に回復しているんですけども、この勢いをそのまま維持したらどうなるかって、先月試算したんです。そうすると、2・07 になるのは、大体 2050 年の半ばなんですよ。そのぐらいのスピードです。去年までのでいくと、2040 年頃。いずれにしろ、今のペースでは、21 世紀の半ばにならないと 2・07 ってのは取り戻せないと思いますね。よっぽど、無理をしなくちゃいけない。

その無理をするとどうなるかというと、とんでもない話で、国は、女性はもっと社会に進出して、いろんなトップとか代議士とか教授とか、30%、管理職のような仕事を占めなさいというのを目標にしている。その一方で、もっと子ども産んでくださいね、と。これ、大変な話ですよ。まあ、ただ、これ、どうすべきかというのは、女性自身、あるいは夫婦、家族にまかせるべき問題であって、自然のままで、むしろいいのではないかと、私は、今、思っているんですけれどもね。でも、まあ、神奈川県にいくと、また違ったこといわざるをえないかもしれませんが…。

高田

なるほどねえ。実際に政府は、このまま人口減少が進めば、自治体の 20%ぐらいがなくなってしまう、などと言っているようですが、そんなふうになるほかないのですか。というのも、たとえば江戸時代には、日本の人口が 3000 万程度だったのに、ちゃんと人口は全国にばらまかれていたんでしょ。ですから問題は、人口が過剰に都市部に集中したことにあるのであって、それを政策的な誘導で再分配すればいいのやないのかなあ。

だって現在、大都市の人口維持力は確実に低下しています。東京にだって、ちゃんとした仕事はなかなか見つか

らないわけですし……。それに対して、農業や林業や漁業などに労働力が移動しうるような産業政策を採用すれば、都市から離れた農山漁村地帯に新しい産業を興すルことは不可能ではないような気がします。

必ずしもすべてが奏功しているわけではなさそうですが、たとえば藻谷浩介さんの「里山資本主義」といった考え方などには、大きな可能性があるように思います。

さあそこで、先の梅棹さんの文明の発展段階説を別の視点で敷衍すると、つぎのような見方ができませんかねえ。それは、

「文明の段階が一段階あがると、直前の時代の基幹的な仕事が遊びになる」

という法則性です。実際、狩猟採集社会では、狩猟や採集は生存に必要不可欠な仕事でした。それが、農業社会に推移すると共に遊びに変化します。ついで工業社会が始まると、農業の真似事としての園芸が遊びになる。そして今日、情報産業社会への推移が始まると、工業生産の真似事としての物作りや手仕事が遊びになっている。東急ハンズやロフトなどという流通業は、工業生産の真似事のための道具や素材を売っているじゃないですか。

むろん農業も、都市では遊びとしての資質を獲得し始めている。農業というよりは園芸に近いのでしょうが、都市生活者の間に広がっている家庭菜園などは、その一例です。それに諸外国の例を見ると、例えばドイツで消費される野菜は、10%が「クラインガルテン（市民農園）」で作られているのだと言われます。日本でも、こうした趨勢が広がっているように思うのですが……。もっとも日本の都市とその周辺には、潤沢な土地がないためか、なかなかドイツのようには行かないようですね。実際、土地を借りてする家庭菜園には、結構な金がかかる場合があるという話を聞く機会もすくなくないようです。

末原

でも、都市でも、農業ができる時代なんですね。そこら中、ビルの上、マンションの横でもできる。育てるというのは面白いんですね、植物は。手をかければ報われる。人間関係の場合は、そうはいかない。やっぱり、ぼくらの青春時代から見ても、農村から都市に出てくるエネルギーというのはあって、惹きつける都市的な何か、文化といいますか、食べ物であったり、音楽であったりまあ、そういうものが都市にあったわけですが、それが、日本中に広まってしまった。米山俊直さんがいった「都市列島日本」ですね。どこに行っても都市的な生活スタイルが入っている。別に、農村の子は里山のことをよく知っているわけでもなく、塾に行ってゲームを楽しんでいる。だから、逆に、農漁村的な生活ってものがありうるだろう。

ぼくは、大学の先生になって、夏休みというのがすごいモチベーションだったんですが、だんだんなくなってきましたね。なぜ、日本の社会には夏休みがないんですかね。フランス人なんて、バカンスがありますよね。何はともあれ、どこか違う所に行って、都市的な生活とは違うことをやっている。

高田

そうそう、フランス政府は 1980 年代に、それまでの「青少年・スポーツ・余暇省」を解体して「自由時間省」を作りました。で、従業員にきちんと自由時間を保障しない企業にさまざまな規制をかける。同時に、そうして生まれる自由時間の受け皿として、地中海沿岸のラングドック地方に巨大なリゾートを開発した。結果、人々の自由時

間が増え、余暇産業が発展し、失業者が減少したわけです。

山極

日本でもやろうとしたんですけどね、「産休」を取れ、特に、父親にとらそうとしたんだけど、ほとんど実現していない。しかも、夏にまとめて 1 周間以上休み取りなさいといってるんだけど、自分の代わりがいない、ということで難しい。企業では、営業を止めるわけにもいかず取れないというのが現状でしょうね。

鬼頭

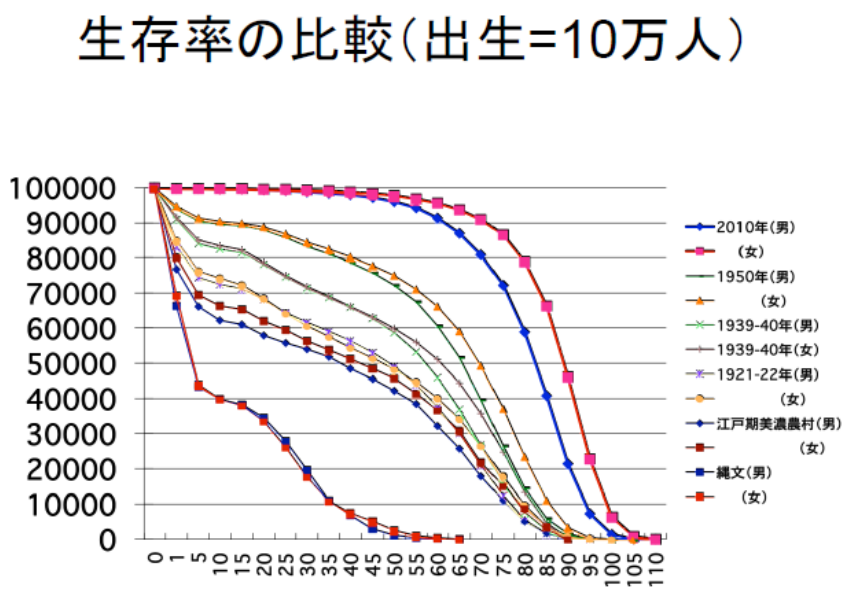
江戸時代の伝統を引き継いで、明治、戦後にそれぞれ形を変えながら、非常に労働集約的な生産にあった社会を作ってきたわけですよね。それが、今までの日本を支えてきた。それと集団主義っていうのがあって。今の余暇の問題でいうと、日本人は、集団性っていうのを重視するのか、一人一人が勝手に休むっていうのを非常に怖がるし、取らせない。だから、国が率先して休みを作っちゃうわけですよね。8 月に「山の日」を作るとか…。

山極

しかもね、（日本人は）余暇を、一人では過ごせないという悲しい現実がある。

鬼頭

それでね、先ほどの高田さんの図に触発されたわけではないですが、きのう急きょ入れたグラフです。（資料）人口が減ったらどうなるかという話なんですよ。これ、縄文なんですが、小山修三さんが都道府県別に推計されているんで、それをベースにして、人口の分散度を計算してみたんです。それぞれ都道府県の面積と人口との関係で、どれぐらい人口が集中しているかを見ました。ハーフィンダール指数ってのは、これを引き出してやるんですけども、これは、企業の集中度を示す時に、経済学者がよく使う指標なんですが、何通りかの方法でやるんですけど、パターンはみんな一緒です。どういうことかっていうと、この棒が長いところは集中度が大きいんですね。短いのは、集中度が低くて人口が分散するっていうことなんです。



注：縄文時代は小林和正のデータにPrinceton Model South 1を適用、美濃農村は斎藤（1992）、1921/21年以後は政府統計による。

31

縄文時代っていうのは、人口が減るんですけども、今まで集まっていたところの人口が減るわけですから分散していく。西日本の方から、人口が入ってきたり、あるいは、気候が悪くなった時、西日本は減らない。むしろ、増えていて、分散化が進んでいく。これが、縄文ですよね。弥生から、奈良、平安、その末期ですけれども、あまり変化は大きくないですが、奈良の時期と比べると、人口が増えていく時代は集中度が増していくんですけども、停滞、減少の時代には分散していく。それから、江戸時代もそうなんです。これは、1600 年に 1200 万人という数字を使っていますし、近畿のウエートが高過ぎるかもしれません。ちょっと異常な伸びのように見えますけれども、平安末、鎌倉初期にくらべると、集中度が増したということは言えるんですね。ハイフィンダール指数だと、もうちょっと穏やかに見えます。ところが、人口が頭打ちになって停滞していく幕末にかけての時期になると、むしろゆるやかに分散が進む、あるいはもう集中しなくなっていくんですね。だから、人口減退

期っていうのは、地方が次の発展の種を秘めて元気なってるというか、まあ、中央がダメになっているということかもしれませんけれども、まあ、そういうことが言えると思います。

ところが、現代はですね、2000 年までで計算したんですけれども、これ、集中度が増えてるんですよ。きょうは、わざと載せなかったんですけれども、国土交通省で、実は報告したんですが、その時には、30 年先の将来推計は、もっと中央に集中するんですよ。もっとも、それは、日本創世会議が、「消滅可能性都市」なんてことをいってますが、今までの推計の仕方が、非常に単純に、過去の人口移動のトレンドを将来に伸ばしただけの話ですから、当然、大都市の集中度は伸びるに決まってるんです。だから、ちょっと先までは描けないんですけども、ちょっと頭打ちになってきてるんですよ。但し、日本の場合には懸念がありまして、これ、今年発表された都道府県間の人口移動の転入超過数ですけれども、東北では宮城、首都圏では、埼玉、千葉、東京、神奈川が人口を引き寄せています。それから、名古屋、大阪、福岡、それと行きたい人が多いんですね沖縄。それ以外は、みんな放出ですよね。減少しています。

これ、世界の他の国と比べてみると、かつて、ソウルの一極集中が異常といわれたんですけども、今は、東京です。1960 年、70 年ころから、ニューヨーク、ロンドン、パリ、ローマはもう安定しているんですよね。ところが、東京はまだまだ人を集めているんですよ。国連の調査ですから、東京というのは首都圏で、東京と千葉、埼玉、神奈川の 3 県を入れてるんですね。これがまだ増えていくだろう。この調査でも、現に、7 万人も東京だけで吸い寄せているわけですから、やっぱりこれ異常なんですね。

だから、人口の分散をはかる。その中でどうやって、人口が減っていく社会の中で、土地、国土を利用していくかっていうことで、アイデアを出していかなきゃいけないだろう。もし、出生率が 2・07 に戻っていくとすれば、高齢化の方はね、必ず落ち着きますよ。今よりは高い水準だけれども、高齢者はこれ以上増えなくなります。出生率をあげれば済む話だが、これだけはダメなんですね。つまり、人間の意識、目をどうやって地方に向けさせるか、です。まあ、里山資本主義の話が出てましたが、私も、あのアイデアはいいと思ってるんですが、地域主義をどうやって使うかっていうことですよね。

山極

では、そろそろ、フロアから意見をいただきましょう。質問とかありましたら、どうぞ。

麻植　　茂（未来を創る財団事務局長）

今まで、人口減少のことをずっと、昔から現在のところまで一緒に論じてられたけど、昔の、例えば飢饉で減少した時って、お年寄りと赤ちゃんというようなところが減って、人口構成としては、働き手というか、生き生きしている年代の割合は、逆に、増えたと思うんですよ。今の見方って全然違いますね。もう増えるのは終わったっていう話なんですが、若い人が、本当にずーっと減っていっている。年寄りは、まあ、これから少しは減るだろうというお話なんですけど、人口構成から見たら、これからは働かなくてもいい時代、というのはどうでしょう。若い人が、お年寄りを食べさせるためにどれだけ働かなければならないか。「これからは、遊んで」なんていうことは、私、ちょっと話が違うのかなと思います。

それから、もう一つ。グローバル化の中で、なんで、日本、あるいは、ヨーロッパやアメリカなど文明国が、人口問題の指標になっていくのか。インターネットの世界では、もう、世界中、ほとんどイーコールです。要するに、一人一人の人間の価値っていうのは同じようになってきていて、これからもどんどんそうなっていく。そしたら、人口が減っているというが、世界的に見ると 70 億人ですよ。これからも、どれだけ増えていくか。この圧力はどんどん増していく。その中で、日本が一定に人口を保ったとしても、お年寄りが圧倒的多数を占めて、これからどうなっていくのか。そういう点が、今まだの議論では聞けなかったので、お考えがあればお願いいたします。

村瀬　雅俊（京都大学基礎物理学研究所准教授）

ちょっと関連して、人口の中身ですね。つまり、人口構成としては、健康な方ばかりではなく、病んでいる方がいらっしゃいます。最近は、鬱という精神を病んでいる方も増えています。だから、人口の数ばかりでなく、その中身が重要な要因の一つですね。もう一つは、明示化された原因にばかり注目が集まっているように思います。例えば、食糧、医療、エネルギー生産、疫病とかです。しかし、現実には、目に見えないいろんなものがあります。化学物質汚染、放射能汚染、電磁波汚染に代表される人工的な汚染因子です。それがどのように人類や生命に影響しているか。例えば、化学物質汚染の場合は、シーア・コルボーンやレイチェル・カーソンの本で紹介されていますように、既に、野生生物で、卵を抱かなくなった親鳥がいるとか、卵自身が孵化しないとか…。山極先生のご専門ですが、動物の社会はどうなっているのか。動物の社会が、人間の未来のひな形になっているかもしれない。そういう点でご意見をいただければと思います。

五十嵐　敏郎（金沢大学大学院生）

私は、19 世紀から 20 世紀にかけては、極めて異常な時期だった、と思います。というのは、非常にエネルギー密度の高いエネルギー資源が開発されて、利用されてきた。なおかつ、それに加えて、中世小氷河期からの幸せな回復過程で温暖化が進み、農業生産にもプラスに働いてきた、と。どこかでターニングポイントになるのか、これが不明なことで、そのあたりをどういうふうに考えればいいのか。

例えば、エネルギー資源一つ取ってみても、急激に、指数関数的に増加してきた傾向が今後も続くのか。一方で、今後はエネルギーの質が低下して得られるネットのエネルギー量が減少するという説もあります。それから、気温の問題にしても、2000 年以降、上昇は止まり始めているという説もありますので、そのあたりが、人口のこれからの、まあ、いうたら、今までの異常な時期がどういうふうに修正されてくるか。私自身は、多分、自然にある水準になってくると思うんですけども、問題は、それまでの過程に、いろんな意味のアンバランスが生じている。それをどのように整合していくかということです。世代間、地域間のアンバランスなど、いろんな意味のアンバランスをどう調整していくのかということが、一番大きな問題じゃないかなと思っています。

山極

はい、ありがとうございました。３人の方からご質問いただきましたけれども、まず鬼頭さんからお答えをいただきましょうか。

鬼頭

はい、全部に的確にお答えできるかどうかわかりませんがませんけれども、まず、最初に、高齢者の問題。社会の中での生残のしかたということですけれども、これは大きく変えていかなきゃなんないと思います。きょうは、主に、人口の規模だけを問題にしたんですけれども、もしかしたら、これは、山極さんに補強してもらうのがいいかもしれませんね。生物の種としてのライフサイクルってのが、非常に大きく変わった。つまり、長寿化したって

ことが一つありますよね。縄文から江戸時代、大正期、昭和戦前期、1950 年と 2010 年の最新の年齢別生残率というものを取って見てるんですけれども、もう、今、65 歳まで生き残れるっていうのは 9 割くらいいるわけです。そういう社会の中で、高齢者の健康寿命というのも伸びているんだといわれていますし、もう、今までのような 60 歳で還暦、65 過ぎたら年金いただけますよ、という時代ではないだろうと思いますね。これを、どう、考え方を変えていくのか。人間の一生の、ま、ライフサイクル、あるいはライフコースってのをどうしていくのかってことも、併せて考えていかなきゃいけないだろうというふうに思っています。

これは、あくまでも平均値ですけれども、結婚年齢、子供の数とか、成人年齢とかをベースにして、結婚してから、子育ての期間にどのぐらい時間を取られているのか、その後、夫婦だけになった時間はどれぐらいか、現在だと 65 歳ですが、夫が 60 歳で退職してから老後の時間がどれぐらいあるか、を示した図なんですけれども、（資料）みんなが長く生きられるようになったと同時に、一人一人の結婚してからの期間の内容も大きく異なってきている。ここの部分をどう使うかということだと思うんですね。で、フランスあたりだと、定年は延ばしたくない。1 年を通じてのバカンスというのもあると同時に、人生の上でも、定年後は、自分の時間なんだと。自分の趣味をいかしてゆっくり遊んだり、悠々自適の生活を送りたいんだという考え方があるんだけれども、じゃあ、日本でもそれで通るんかという問題ですよね。高齢者という定義の問題、それから、いろんな年齢の階層の人たちが、その社会の中でどう支えあっていくかということで、また、新しい概念というものを出していかないと、社会的に大きな負担が、ずっとのしかかって来ると思いますね。今、それは動き始めているんだろうと思います。まあ、端的にいうと、年金を何歳から支給するかとか技術的な話になっていますけれども、もっと、その、生き方を見直すっていう考え方に変えていかなきゃなんないだろうと思っていますね。これが一つです。

次、世界人口との関係なんですけども、70 年代は、人口がまだ 30 億から 40 億人へいくという時代でしたから、今から比べれば半分ぐらいの規模だったんですけども、それでも大騒ぎをしていたわけですね。その中で、日本は、人口をむしろ減らすのが世界に対しての貢献だていうふうなことを言っている研究者もいました。新聞なんかも、そういう論調で書いていたと思います。さっきのご指摘の中で、（人口問題を）国のレベルで考えるってのは、果たしていかがなものかというお話がありましたけれども、私も、そういう考え方でいけば、一つの地域の人口がなくなってしまうってことについて、当事者としてどう考えるかは別として、世界的に見れば、ある意味では貢献かもしれない思います。しかし、現に、国家というものが存在しているし、国境ってのもあるし、生活の単位が国というものである以上、その一つの地域社会を安定させるということは、どうしても必要なんじゃないかと思いますから、やっぱり、とりあえずは、何人を維持しなきゃいけないって考えはないんですけれども、人の移動も含めて、日本の人口を安定させることは必要だろうと思っています。

山極

村瀬さんからの質問もありましたので、私が補足しますと、人間というのは、「多産高齢社会」をずっとやってきたんです。今、初めて「少子高齢社会」という時代を迎えています。多産であることと高齢化っというのは、非常に強くリンクしてきたと思います。これを、ずっと有史以前からやってきた。これが、他の霊長類と比べると、大きな特徴です。ただ、少子社会は、人間に近い類人猿に、みんな共通です。寿命が長いというのが、新しい事態なんですよ。子どもを生き延びさせるためには、自分を生き延びさせなくちゃいけないってのが人間の生活史戦略になったからなんです。普通は、トレードオフになって

いて、自分の代わりに子どもを生き延びさせるというのが、普通の生きものの戦略です。それと全く違う戦略を、人間は作ってきた。これが、一つの人間の繁栄の理由だと思いますけれども、人間がこの戦略を取ってきたがために、自然がかなり撹乱されています。急速に絶滅する動物が多くなっているわけですね。「人間圏」というものを今、考えなおさなくちゃならない。最近、日本政府は、「人間と自然の共生圏」という考え方を打ち出してますけれども、里山復活の話もそうなんですが、生活の組み立て方ってのを変えようという考えが出てきています。新しい時代に入り始めたといえるのではないでしょうか。

それから、19 世紀から 20 世紀は特殊な時代、「ターニングポイント」だったという指摘がありましたが、高田さんいかがでしょう。

高田

端的にいうと、この 100 年余りは、人間がその体外で、べらぼうなエネルギー消費を始めた時代だと言っていいのではないですか。実際、現代日本人が体内に摂取しているエネルギーは、せいぜい 2000 キロカロリー程度です。それに比べると、照明や移動、調理や空調などのために体外で消費しているエネルギーを合計すると、なんでも体長 30 メートル以上の恐竜が食糧として消費していたエネルギーと同じぐらいになるんだそうです。で、こうしたエネルギー大量消費型の動物は絶滅していったわけですが、人間の方は未だ生き延びている。これって、もしかすると異常なことなのかもしれません。

しかも、そんな時代に、日本の時の政府は今なお、ひたすら産業生産性を高めようと試み得る。安倍さんがどんな将来イメージを描いているのかは不明ですが、これまでの産業発展と同じ方向で生産性を高めようなどという試みが奏功するはずがありません。

こうした、将来への適切な展望のないまま、従来型の教育を受け、仕事をさせられたりしていると、うつ病やら何やら、頭がおかしくなっても不思議はありません。

そこでフランスやイタリアなどの産業政策を眺めてみると、ワインやファッションで外貨を稼ぐわけでしょ？そのために彼らは国家政策として、

「オシャレはカッコイイ。ワインのもカッコイイ」

と、まず世界に向けて、みずからの文化を輸出し、その上で、それに感応した日本人を始め、世界の国々の人々に向けて、それら高価な品を売りつけてくるわけです。

じゃあ、日本は何を売ればいいのか、となると、まず役人や産業人から出てくる声は「新幹線」……でもね、4、5 分おきに発車して、ものすごいスピードで、まったく遅れることなく運行する鉄道へのニーズなんて、日本を除いて世界中の先進国にあるのですかねえ。

そういう意味で現在という時代に、いったい世界では何が求められているのかということを考えてみる必要がある。こういうことを考えるに際しては、私たち年寄りも一定の貢献ができるかもしれない。それを参考にしながら、若い人たちが新しい時代に求められるものやことを構想し、創り出す。本日のディスカッサントの皆さんに刺戟されて、そんなことを考えてみました。

山極

はい、ありがとうございました。では、これからは、ワールドカフェに引き継いで討論したいと思います。きょうは、鬼頭さんに人口と経済、それからインフラ、そして人間の生き方など、歴史を踏まえながら未来を話していただきました。これを基に、「新しい２１世紀づくり」という AGORA のテーマもございますから、これから日本社会はどうなっていくのか、どうなっていくべきか、「人口」をキーワードにいろんな側面から討論していきたいと思います。

（編集　辻　　恒人）

「京都から挑戦する“新”21 世紀づくり」

第２回「人口問題を文明史的に考える

～日本の人口の今と未来」

☆ワールドカフェ

クオリア AGORA 事務局

ファシリテーターの山極さんからのお題「これからの日本社会はどうなっていくのか。どう創っていくのか」について、人口問題を多面的に切りながら、日本の将来について、意見を交わしました。

▽第１テーブル報告　中野千春（市場調査社大阪）

ここのテーブルでは、きれいに結論は出ていないんですが、2030 年の社会っていうことで、やはり問題は、少子高齢化だろうっていうことから始まりました。今の問題として、女性の幸せ感みたいなのが変化しているのではなかろうか、と。結論は、生き方の多様性とかによって少子化が発生している。但し、それは結果なのか、もしくは、原因なのか、どっちなんだろうねという話が出たりですとか、仕事も子どももとか、女性は難しいよねえと。そんな話がありつつ、2030 年に目を向けると、35%がインドの人と中国の人になってしまうので、さっき、余暇の時代を過ごしたらいいみたいな話がありましたけど、まあ、食糧とかエネルギー不足問題からは逃れられないだろうとなりました。

そういう中で、どうやって人口を増やしていったらいいんだろう、ってとこに戻ってきたのですが、上の年代の方からは、そもそも、最近の若い子は「自己中」なんじゃないのという指摘がありました。で、少し前は「利他主義」っていうので、社会に合わせて行く生き方っていうのが推奨されていたし、それをしていたんだけども、最近の子は自己中心主義になっていて、その結果として、毎日 100 人が孤独死されているようなんですが、どの世代も孤立しちゃったりとかして、それぞれがバラバラになってしまっている。昔は、競争することによって豊かになっていたんだけども、それが、今は、不特定多数のための方針みたいなことになってしまったりとかして、人と人とが向き合うっていうのが避けられている、みたいなことが起こっているのではないかという話が出ました。

それで、最終的に出てきた話が、どういう社会が幸せなのかということでした。それは豊かな時間を手に入れるということではないかということになり、これから、時間をどう扱っていくかということが必要なんじゃないかなという結論となりました。

▽第２テーブル報告　川田　哲也（京都大学大学院思修館）

まず、今日本の中にどんな問題があるかということが、いろんな視点で、雑談も含め出てきました。

そもそも、若干、人口の話なんですが、東京への集中っていうものが、何が問題なのかわからなかったので問いかけさせていただき、いろんなコメントをいただきました。やっぱり、テロとかのリスクがあるので分散する必要がある。もしくは、リビングコストが高い。ま、住むのが嫌だ。東京へ行くと疲れる雰囲気がある。特に、京都、関西から来る人にとっては、自分を卑下して笑いを取りに行っている時に「もっと自分を強く持って」みたいに真面目に意見をされる、そんな東京の感覚が受け入れられない。とにかく、東京に行きたくないという意見がたくさ

んあって、なるほどと思いました。

その中で、東京に行く理由は、稼ぎに行くという話が出たんですけど、そのことから、何のために働くのかという話になりました。昔から、人はストック、つまり、富を蓄積するため働いたり、国力を上げるために働くことが必要だったんじゃないか。これが現状なんですが、これからは、余暇のため、楽しく生きればいいのではないかという高田先生のお話から、それはそうだけれども、なんで、それができないのかという話へと移っていきました。なかなか、自分が純粋に楽しむために生きようとしても、その行為が生産活動に結びつかなければ、それは難しい、ということで、「楽しく生きれば」という議論は、結局、盛り上がりませんでした。

では、働くということなんですが、その場合、今の日本の何を売ったらいいかということで、日本の強みとは何かということが、漠然と出ました。その中では、「サービス力」を売ればいいだろうと。それは、「おもてなしの心」。この言葉は、なかなか話題にもなりましたが、おもてなしをサービス化して、途上国等とかで普及していけばいいのではないか。資源も乏しい日本でもできることで、これはいいんじゃないかと。さらに、教育の話も出ました。授業は聞いてるだけで苦行のような今の大学の授業はまだまだだね、という話も。

それで、最後になって、人口の今の現状をどうするかという話をしました。それで、理想のあるべき姿ということで、減ることもありだろうと。一つの意見では、例えば、200 年をかけて 3000 万人ぐらいに減らしたほうがいいんじゃないか、というのがありました。今の、安倍さんが掲げる 1 億人は、これ、必須なことじゃない。そもそも、それに関して疑ってかかるべきだ。じゃあ、なんで、3000 万人か。江戸時代は、3000 万人で何とかなっていた。ということで、徐々に 200 年ほどかけて、小さな日本というか、3000 万人で持続可能な社会ができたらいいんじゃないかということでした。そのために、資源をうまく使ってしのぐ、と。何とかしのいで、200 年かけて 3000 万人に落ち着いたところが、これからの日本じゃないか、と。

▽第３テーブル報告　上田　源（同志社大学）

まず、そもそも、人口減少は、報道等されているほどに、悪いものなのかというところから始めました。人口減少を、もはや、前提とした国づくり、減っていくのは仕方ないので、それを踏まえた上で、国土をどうやって利用していくのか、っていうことを考えるべきだろうっていうふうに話が進みました。

人口減少といわれていますけども、少子と高齢化と二つあって、まず少子の部分ですけれども、私は若年層ですから、これから、結婚をしたり、子どもを作ったり、年金を払ったりという世代です。それで、子どもがほしいか、ほしくないかといった時に、私は、全くほしくないタイプの人間なんですね。それは、何故かというと、育てる自信がないからですね。どうやって、育てていったらいいかわからないし、結婚しても、奥さんと二人で子どもを育てるということに、漠然とした不安感があります。なので、そこに対して、ひとつ、使うべきは、老人だろうと。おじいちゃん、おばあちゃんは、自分の子どもを育てたら終わりではなくって、さらに孫の世代まで育てていく。そもそも、老人がボケるのは、自分が助けられ続けているからであって、自分が、孫を助ける状態になればボケないんじゃないか。ボケない老人は、大切な人的資源になっていくのじゃないのかな。例えば、学童保育と老人ホームを一緒にしたりすれば、これ大きな力になると思います。子どもたちにとっても、普段会えないおじいちゃん、おばあちゃんに会うってことは、いい刺激になるだろう。

あと、私もそうですけれども、学生とか、一人暮らしをしている若者を、地域のお祭とかに参加をさせる。これをやると、仮に４年間しか住んでいなくても、若者の力がコミュニティーに使えるようになり、同時に、こういうものを起点として、コミュニティーが、もうちょっと強固になっていくんじゃないのかな。

最後ですけど、今は、消費と所有の社会である、と。で、特に日本は、未だに、旧態依然である。ですから、ここから、遊びというものを基にして、共感とかシェアをしていくっていう社会に移行していくべきではないか、と。つまり、今なお、ただ、単純に、モノを作り、買い、何か所有するという社会から、誰かと何かを共有し、人間関係を築くという、そういう社会にどうやって移行するかというのが、今の日本に求められていることではないか、

そういう結論になりました。

▽第４テーブル報告　木原奈穂子（日本テクノロジーソリューション）

このテーブルでは、人口減少の要因というところから始まりました。それは、生物学的に自然現象が起こっているのではないか。つまり、生きにくい社会だから、自然現象的に疫病が起こったりして人口減少が起こっている、と。つまり、今の社会からは、昔でいえば、相互扶助的にする、人のためにする仕事が減って来ているんじゃないか、と。そのことから、生きにくい社会を解決することが、人口問題の解決にもつながるということで、社会的イノベーションを起こすべきでないのか、という話に移っていきました。社会的イノベーションっていうのは、例えば、現在の製造業的な話を中心に見ますと、９時～５時で働いて、時間給で正社員として認められるというものですが、こんな社会は、そもそも間違っているんじゃないか。つまり男性視点がある大量生産、大量にものをつくれば、生きていけますよという視点から、女性の視点へ。具体的には、権威主義から権威的でない社会、上下関係的な関係からそうではない社会、こういうふうに変えていくイノベーションを起こさないと、社会は変わらないという意見が出ました。

また、日本的な文化っていうのはすごく大事で、これを、どれぐらい高付加価値していくか。このことが重要なんじゃないかという話も出ました。つまり、日本国内でもそうだし、これを、どれだけ世界に発信していくか。そして、国外でそれをどれだけ、定着していけるかが課題だ、と。これを、業界の中で、どれだけ共通化し、分別化を進めていけるか。このことが、日本の強みにつながり、ひいては、人口問題も解決できるのではないか、という結論に。

クオリア AGORA 事務局

はい、それぞれのまとめを有難うございました。では、末原さん、鬼頭さんからご感想をお願いいたします。

末原　達郎（龍谷大学経済学部教授・農学部設置委員会委員長）

実は私、山極さんとは、アフリカのコンゴの森の中で知り合った仲なんです。私がですね、コンゴの森で、農耕民の調査をしていたら、現地の人に、あの山の中に、「ニャマギラ」というのがいる、と。これは、現地の言葉で「ニャマ」というのは動物で「ギラ」というのはゴリラなんですが、それが、バイクに乗って、何週間に１回か、市場の村に行って、ありったけの酒をすべて飲んでいくというすごい伝説を聞かされたんです。どんな人だろうかなと、思っていたんですが、まあ、私は、日本の農耕民のように黙々と、毎日毎日畑に行き、毎日、毎日畑を測り生産量を調べるということをやっていたわけなんですが、そうこうしていて、山極さんに会ったんですね。その山極さんからお声がかかって、きょうここに参ったわけです。楽しかったですね。こんな会とは思いませんでした。こんなに老若男女が集まってるとは思わなかったんです。結構、みんな言いたいこと言いますし。いくつか、発想の起点となることが得られました。この種を、農耕民らしく育てて、また次につなげたいというふうに思っております。

鬼頭　　宏（上智大学経済学部教授）

お招き、ありがとうございました。スピーチの持ち時間が 30 分だったので、何を話そうかと迷い、大分切って、ちょっと中途半端で申し訳ございませんでした。しかし、後のセッションの種を撒くことはできたのかなと思います。討論をした時もそうですが、最後のご報告を聞いて、こういうふうな考え方があるな、といくつか考えを変えなきゃなんない部分もあるし、また、信念固めたところもあります。例えばその一つは、ここにも、若い、現役の学生さんがいらっしゃるし、私と同年輩の人もいらっしゃる。いろんな世代が集まっているのが社会なんで、それを、日本の年齢階梯制の非常に強い社会のように、何歳だから何をしてはいけない、何歳だから何をしなければならない、というような壁は取っ払うべきじゃないか。そうやりながら、どんな人でも、支えられる人は支える、面

倒見てもらう人は面倒を見てもらうっていうことをやっていくような、もっと、そういうお互いに手伝ったり支えたりするような社会にできればいいなと思いますね。きょうは、小さな世界で短い時間ですけれども、まさにこのことを実感しました。

で、余暇の問題、いろんな考えがありますが、一つだけ申し上げておくと、いろんなライフコースが多様化するというのを、今まで以上にやっていかなきゃいけないですけど、それと同時に、何歳だからというのを乗り越えて、必要になったら大学に戻ってくるとか、社会に出て働くとか、いろいろな「行ったり来たり」というのを年齢超えて生涯通じてやるというのも、一つの生き方なんじゃないか。そういうことが許されるような社会になったら、とても、みんないろんなことができて、力が発揮できるんじゃないのかなと思っています。ぜひ、これからも、みなさん、いろんなアイデアを出して、これからの日本を背負っていただきますよう。それにふさわしい若い人もいらっしゃるので、期待しております。有難うございました。